

第1回ロボカップ世界大会名古屋開催の経緯

ロボカップジャパンオープン 2014 SSL-H リーグ優勝

チーム Chukyo RoboStars 監督 沼田宗敏（工学部教授）



左より興水 IASAI 所長、福村先生、インタビュアー 沼田

2050年に、サッカーのワールドカップ・チャンピオンチームに人型ロボットで勝つという世界プロジェクトがロボカップである。名古屋市の河村市長は昨年、このロボカップ世界大会を名古屋市へ誘致することを表明した。現在、ロボカップ日本委員会と連携しながら「ロボカップ世界大会 2017 in Nagoya」を実現するため誘致活動中である。2017年は、第1回ロボカップ世界大会が名古屋で開かれた1997年からちょうど20年という、大きな節目となる。このため、ロボカップ発祥の地で再び世界大会を開催することは、日本ばかりでなく世界の多くのロボカップ関係者の悲願となっている。

中京大学人工知能高等研究所（IASAI）ではこのような状況を踏まえ、2015年4月より「Aiロボットプロジェクト」をスタートさせた。これは「ロボカップ世界大会 2017 in Nagoya」に向け、ロボットおよびこれに関わるAI（人工知能）技術研究を支援する2017年までの時限プロジェクトである。そこでIASAIは昨年12月15日に、第1回ロボカップ世界大会開催に深く関わって来られた福村晃夫 IASAI名誉所員にインタビューを実施した。ロボカップのルーツに関わる貴重なエピソードを多く拝聴したので、紙面を借りて報告する。

（インタビュー：沼田宗敏、オーガナイズ：興水大和 IASAI 所長、補佐：D1 近藤雄基）

【ロボカップは人工知能国際会議の関連イベントとして名古屋でスタート】

沼田：第1回ロボカップ世界大会（名古屋）は、1997年に名古屋で開催された人工知能国際会議の関連イベントとして行われました。この国際会議が名古屋で開かれた経緯についてお聞かせください。

福村：環太平洋人工知能国際会議（PRICAI：PACIFIC RIM INTERNATIONAL CONFERENCE ON ARTIFICIAL INTELLIGENCE '90）を開催し、自ら General Chair Person を務めた。もう1つ国際会議をやりたいと思っていた。そのような時、古川康一さん（慶大教授）がAIの第15回国際会議（1997年：IJCAI-97）日本開催という切符をもらってきた。当初の開催候補地は横浜国際平和会議場（パシフィコ横浜）だったが、バブルがはじけ横浜が「やらない」と言って来た。あわてて、大垣のソフトピアジャパンなどを開催地候補として検討したが、狭くてとても無理だった。そこで私が「名古屋はどうですか」と助け舟を出したところ、「それなら日本委員会へ

3千5百万円準備できるか」と頼まれた。

興水：初代人工知能学会会長だった福村先生が頼みの綱だったわけですね。

福村：「盲蛇に怖じず」で、独自に国際人工知能シンポジウム名古屋の組織委員会を作って検討した。愛知県、名古屋市、柏森情報科学振興財団に働きかけ、かなり出してもらうことができた。大須賀節雄さん（IJCAI-97 日本委員会委員長）に上記の経費を保証します、と一筆したためた。これとは別に、国際人工知能シンポジウム名古屋のエキシビションとして併催した「新地球博」に、中京大学から2コマ分（800万円）を出してもらった。名古屋の組織委員会が準備した資金でIJCAI-97を十分賄うことができたようだ。実際のところ、当初の見込みほどは使わなかったようだ。

【第1回ロボカップ世界大会開催の経緯】

沼田：1997年8月に名古屋で開催された人工知能国際会議で、ロボカップ世界大会をするようになった経緯についてお聞かせください。

福村：人工知能国際会議付帯の学術イベントとして、ロボカップ世界大会を開くことになった。開催を間近に控えた1997年1月、ロボカップを以前から計画していた阪大の浅田稔教授に呼びかけ、第1回Kフォーラムを北陸の片山津温泉で開催した。

沼田：KフォーラムのKは、福村先生が選考委員長を務められている柏森情報科学振興財団のイニシャルですね。手元の資料でも、Kフォーラムの主宰者は当時中京大学情報科学研究科長だった福村先生となっています。

福村：浅田稔教授、北野宏明さん（ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー）、松原仁さん（電子技術総合研究所主任研究官）ら産学官の研究者ら12名が集り、2日間にわたってロボカップの技術的課題とその将来展望、第1回ロボカップ世界大会の運営について討議した。ただ、当時は名古屋開催の第1回ロボカップ世界大会にマスメディアはあまり関心を示さなかった。メディアが注目し始めるのは第2回フランス大会以降だ。

沼田：フランス大会が開かれた1998年は、人のサッカー・ワールドカップも同地で開かれました。それもあってメディアが注目したのでしょうか。

福村：北野さんと浅田先生は人工知能の若手のホープだった。浅田先生はもともとアクティブ・ビジョンが専門だが、2人はロボットをやり始めた。ロボットにサッカーをやらせるというコンセプトは、おそらく2人から出たのだろう。そういう意味で、第1回Kフォーラムはロボカップ世界大会のキックオフミーティングだった。かなり議論が煮詰まり、有意義な準備会となった。翌年以降もKフォーラムを続けた。身体性をテーマにしたフォーラムは2回行った。

【ロボカップ日本委員会設立】

沼田：ロボカップ世界大会の翌年にロボカップ日本委員会が設立されました。手元の資料では、顧問委員会が浅田稔先生（阪大）、有本卓先生（立命館大学）、石黒浩先生（京大）、福田敏男先生（名大）、福村先生（中京大）の5名です。

福村：僕は第1回世界大会には関わったが、日本委員会についてはあまり関わっていないと思う。ただ、名城大の高橋友一先生と愛知県立大の成瀬正先生は僕の話聞いて、ロボカップをやり始めた。成瀬先生は、元々NTT研究所でマイクロプロセッサの研究をしていた。

沼田：中京大学の工学部選抜チーム Chukyo RoboStars は、昨年のロボカップジャパンオープン（サッカー小型ロボットリーグ人型）で優勝しました。

興水：中京大学は、ロボカップ世界大会開催に関わられた福村先生の伝統を受け継いでいると言えるかもしれません。



攻撃する Chukyo RoboStars
（ロボカップジャパンオープン2014決勝戦）

【中京大学公開講座ソフトサイエンスシリーズ】

沼田：公開講座ソフトサイエンスシリーズ（IASAIと名古屋市科学館が共催）で、「人工知能の父」とも呼ばれるマーヴィン・ミンスキー MIT 教授（第4回：1992.7.10）、ロボカップ創始者の一人北野宏明氏（第14回：1998.10.20）が講演しています。来訪の経緯を聞かしてください。

福村：ミンスキーは認知科学の戸田正直先生が招聘された。北野さんはどなたが呼ばれたのか不明だが、「福村がいる中京大学なら」ということで来られたようだ。ところで、「ソフトサイエンスシリーズ」というタイトルだが、命名は僕である。当初、戸田先生はこれを聞いて、「なぜソフトなのか？」と首をかしげられた。その後、戸田先生がどこかで「ソフトサイエンス」という言葉を聞いたようで、ようやく了承された。



IASAI 設立の経緯を振り返る IASAI 奥水所長（左）、福村先生

【人工知能高等研究所設立】

沼田：IASAI（人工知能高等研究所）設立（1991年4月）の経緯についてお聞かせ下さい。

福村：僕はもともと音声研究をやっていた。情報というのはとても生臭い。バランスを考えると、身体もアートも入れないといけない。そこで1990年に情報科学部を設置したが、その少し前に人工知能学会の会長を務めていた。「身体性」が言われ始めたのがこの頃である。生命システム工学部を作ったのも、ロボットをやろうと思ったからだ。

IASAI ができる前には産学協同研究推進のための公開講座「人工知能シリーズ」（1989年より）があった。僕も何度かここで講演した。

沼田：IASAI 設立にあたって、参考にされた海外の研究所はどこでしょうか？

福村：情報科学部を作る際にMITを視察した。確か、梅村理事長、宮川さん（管財部）、森さん（文学部）、日比野さん（社会学部）、牧野さん（心理学科）らが行かれたと思う。

奥水：スタンフォード大学人工知能研究所の視察は、梅村理事長、戸田先生、檜山先生らだったでしょうか。

福村：僕は行かなかった。当時は情報科学部設立に奔走していた。初の理工系学部設立という重責で体調を崩した。名古屋というところは、当初ロボットにあまり興味を持たなかった。トヨタ自動車へ行きIASAIの説明をしたら、「学者は要らない」と言われた。人工知能という言葉の説明することが大変な時代だった。IASAI 設立には7億円を要した。富士通研究所3億円、日本電装5千万円、名鉄コンピュータサービス、東海銀行、その他ゲーム会社から寄付を集めた。

【若手への期待】

沼田：これからのIASAIに期待されることは何でしょうか？

福村：中京大学にはロボットをやってほしい。若手の加納先生はAIとロボットの専門家である。Kフォーラムでは2回ほど講演してもらった。

奥水：僕もお呼び頂きましたが、Kフォーラムの出席者は学界の重鎮ばかりです。

福村：長尾真先生（元京大総長）、辻先生（阪大名誉教授）など、そうそうたる面々が集まる。僕に会いたいと言って来てくれる人がおられるのは、学者冥利に尽きる。

沼田・奥水：今日は貴重なお話を聞かせていただきどうもありがとうございました。

福村：ご苦労様でした。